

# 『源氏物語』 浮舟物語試論

— 憂き身からの逃避 —

齊 藤 みすず

はじめに

『源氏物語』には、「憂き身」に類する表現が多くみられる。女性の登場人物たちに「憂き身」を痛感させたものは、男女関係におけるどうにもならない苦悩がその大半を占めている。『源氏物語』正編では、藤壺・空蝉・六条御息所・紫上・明石御方・玉鬘・落葉宮などに「憂き身」の心情が細述され、続編の宇治十帖では、大君・中君・浮舟にさらなる深刻な「憂き身」を慨嘆する様が描かれている。特に浮舟の場合、我が身の極まりない憂き身によって進退窮まり、自らの消滅を願う死を選択するが果たせず、その後横川僧都の手を経て出家をする。出家を果たして一応の安心を得たものの、依然浮舟は身の憂きを解消しえないまま物語は閉じられる。

本稿では、この時代における「憂き身」としての自覚の背後にある宿世思想の概要を宇治十帖最後の登場人物浮舟について考察し、当時の若い女性がどのような思いから出家を志向するのか、その過程を究明しようとするもの

である。

尚、『源氏物語』本文の引用は以下全て新潮古典集成『源氏物語』（石田穰二・清水好子校注 新潮社刊）により、巻と頁数を記した。

### 第一章 浮舟の「憂き身」と「人笑へ」

『源氏物語』には「憂し」の言葉が全編で一八六例用いられている。<sup>注①</sup>鈴木日出男氏は著書『百人一首』要語ノ「ト」の中で、「憂し」の言葉について、「自分自身のせいでつらいと思う気持ち」「思うままにならぬわが身、わが宿世を嘆く」意であり、「身」「世」「宿世」の語とともに用いられることが多い」と述べ「自分自身の存在や、運命に起因するつらさを意味する」言葉であるとされる。

佐藤勢紀子氏は「「憂き身」の思いは、とりもなおさず自分自身を「憂し」と観ずるのであるから、憂悶の発するところは、この我が身以外の何ものでもない。」<sup>注②</sup>と論じられている。『源氏物語』の登場人物の中で「憂き身」に類する表現の用例は、浮舟が十例と最も多く使用されている。過酷な運命に弄ばれるようにして、入水・出家へと辿る浮舟の「憂き身」の自覚が、浮舟の人生にどのように作用していたかを考えてみたい。

常陸の国から上京した浮舟は、亡き大君の形代として薫の庇護を受ける。そうした境遇でありながら、姉中君の夫である匂宮と思わぬ契りを結ぶことになり、薫を頼りとしながらも匂宮の情熱的な愛にひかれていく。

浮舟が「憂き身」を思う初めての場面は、匂宮との逢瀬の後、初めて薫を迎えた時である。薫への良心の呵責がありながらも、それでも、匂宮の面影が目先にちらついてしまうどうしようもない心の葛藤が「涙」となり、「う

たて心憂の身や」(浮舟―四七)と嘆く。そして「男は、過ぎにしかたのあはれをもおぼし出で、女は、今より添ひたる身の憂さを嘆き加へて、かたみにもの思はし。」(浮舟卷―四七)と地の文は、薫と浮舟の心のすれ違いを描くのであるが、ここでも「身の憂さを嘆き加へ」と、浮舟は匂宮と薫の狭間で苦しみ嘆く様が語られている。

その後、浮舟のもの思は匂宮との「橘の小島」の逢瀬でさらに深まっていく。

(イ) 橘の小島の色はかはらじをこの浮舟ぞゆくへ知られぬ

(浮舟―五三)

(ロ) 降りみだれみぎはに氷る雪よりも中空にてぞわれは消ぬべき

(同五六)

(イ) は、年経ても変わらぬ愛情を誓う匂宮に浮舟は返歌するのであるが、浮舟もやはり上の句は「橘の小島」の変わらぬ愛を詠うものの、下の句は「浮舟」の行方が不確かなものと捉え、「憂き」わが身の漠然とした不安を訴える不吉な予感を漂わせる歌となっている。(ロ) は、宇治川の対岸の小家で匂宮との情事に耽溺する中で取り交わされた浮舟の返歌である。ここでの浮舟は決して恋愛の喜びに浸りきっているわけではない。その反面「中空にてぞわれは消ぬべき」という深い不安感を持ちながらも匂宮を想いきることが出来ないのである。

この後の浮舟の己が憂き「身」の嘆きは、連続して歌に詠み込まれていく。

(ハ) 里の名をわが身に知れば山城の宇治のわたりぞいとど住み憂き

(浮舟―六二)

(ニ) かきくらし晴れせぬ峰のあま雲に浮きて世をふる身をもなさばや

まじりなば

(同六二―三)

(ホ) つれづれと身を知る雨のをやまねば袖さへいとどみかさまさりて

(同六三)

(ハ) の歌は、誰へともなく手習したもので宇治の地に住むのが一層辛く思う浮舟の追い詰められた心境が切実に伝わってくる。そして、「宮の描きたまへりし絵を、時々見て泣かれけり」(浮舟―六二)と、薫という夫があり

ながら、なお匂宮に惹かれていく心の動揺を抱えて苦しむ。(二)は、匂宮に返歌したもので匂宮と薫の間に挟まれて苦しむ身は、いっそ死んで火葬の煙となってしまう(頭注 六三引用)と思ひ、匂宮と薫のどちらをも選びようがないことに困惑する。そして、(ホ)の歌は、薫への返歌である。一人淋しく訪われることもないわが身の辛さを詠ったものである。

こうした浮舟の歌の数々から、匂宮と薫に対する浮舟の心がいかに葛藤し、わが憂き「身」の自覚がいつそう深化していることが分かる。

四月の十日に薫が浮舟を都に迎えることを知った匂宮が、先手を打って浮舟を連れ出そうとすることで、浮舟の決断は緊迫し、「なほわが身を失ひてばや」(浮舟―六九)と、自殺への思いが強くなって行くその間の経緯を追跡したい。

わが心にも、それこそはあるべきことに、はじめより待ちわたれ、とは思ひながら、あながちなる人の御ことを思ひ出づるに、・・・中略・・・かかる憂きこと聞きつけて、思ひ疎みたまひなむ世には、いかでかあらむ、いつしかと思ひまどふ親にも、思はずに心づきなしとこそはもてわづらはれめ、かく心焦らしたまふ人はた、いとあだなる御心本性とのみ聞きしかば、かかるほどこそあらめ、またかうながらも、京に隠しすゑたまひ、ながらへてもおぼしはずまへむにつけては、かの上のおぼさむこと、・・・  
(浮舟―五九―六十)

ここには、浮舟の葛藤の全てが網羅されている。匂宮との密事が薫に知られた場合、薫に疎まれたらどうしようと思ふ浮舟の心内、もし匂宮のことが母君に知られたならば、薫によって都に迎えられる日待ち焦がれている母君を裏切ることへの怖れであり、匂宮が刹那的な情熱家ではないゆえに将来があてにならない不安、そして、匂宮に京に匿われても秘密が隠し通せないこの世の中である以上、必ず中の君に知られてしまうことの怖れ、これら

の深い葛藤が浮舟の心を占めていたことが伺われる。

大将殿は、卯月の十日となむ定めたまへりける。誘ふ水あらば、とは思はず、いとあやしく、いかにしなすべき身にかあらむ、と浮きたるここちのみすれば、母の御もとにしばしわたりて、思ひめぐらすほどあらむ、とおぼせど、少将の妻、子産むべきほど近くなりぬとて、修法読経など隙なく騒げば、石山にもえ出で立つまじ、母ぞこちわたりたまへる。

(浮舟―六五―六)

薫による迎えが四月十日と定められたことに浮舟の心内は、「誘ふ水あらば、とは思はず」(『岷江入楚』箋には「薫の方へもしかと心の落ちつかぬ也」とある。)「いかにしなすべき身にかあらむ」と困惑し、さらに、「浮きたるここちのみす」と、匂宮への想いを打ち消す決心がつかず、不安な気持ちが表示されている。ここにも浮舟の「憂き身」の意識が連続している。進退に窮した浮舟は自らの身の振り方を決めるためにも、しばらくでも母君のもとに身を寄せたいと考えることは、行き場を失った浮舟の最後の願いでもあった。しかし母君にも事情があり、左近少将の妻となった娘の出産が近いことから浮舟を屋敷に迎えることは難しく、母君自身が宇治にやってきたというのである。この母君の宇治訪問が浮舟にとって重大な転機をもたらすことになるのである。

浮舟が都に迎えられる日が近いことを喜ぶ母君と乳母の会話を聞きながら、浮舟は物思いに沈んで行く。

君は、けしからぬことどもの出で来て、人笑へならば、たれもたれもいかに思はむ、あやにくにのたまふ人はた、八重立つ山に籠るとも、かならず尋ねて、われも人もいたづらになりぬべし、なほ心やすく隠れなむことを思へ、と今日ものたまへるを、いかにせむ、とこちあしくて臥したまへり。

(浮舟―六六―)

ここでの浮舟は匂宮とのことが発覚したら周りの者たちが何と思うかを気にし、それを未然に防ぐために八重立つ山に隠れたとしても「あやにくにのたまふ人」は必ず探し出すに違いないと思う。結局二人とも身を滅ぼしてし

まうことになるのは必至と考えるのである。いずれ薫の知るところとなれば、今までのように薫の好意的な待遇は期待できなくなると同時に、母や乳母の期待を裏切ることにもなるのである。まさに進退窮まった状況と言える。浮舟はさらに母君の言葉にショックを受ける。

「あなむくつけや。・・・中略・・・よからぬことをひき出でたまへらましかば、すべて身には悲しくいみじと思ひきこゆとも、また見たてまつらざらまし」など、言ひかはすことどもに、いとど心ぎももつぶれぬ。なほわが身を失ひてばや、つひに聞きにくきことは出で来なむ、

(浮舟―六九)

匂宮と浮舟が不都合なことをしてかすようなことがあれば、母親にとってこんな切なく悲しい事は無い。そのようなことが有ったら親子の縁を切る、とまで言い切る母君の言葉に、浮舟は「いとど心ぎももつぶれぬ。なほわが身を失ひてばや、つひに聞きにくきことは出で来なむ」と思い続けている。ここでの「なほわが身を失ひてばや」の浮舟の思ひは、自殺を考える初めての思ひである。今までの浮舟は、薫と匂宮との間に挟まれていかにこの身をもてなすべきかを悩んでいたものが、ここに来て初めて「わが身を失ひてばや」と死を願望するようになるのである。浮舟が自殺を考えるきっかけとなったのは、まぎれもなく母君の言葉が引き金となつていよう。

この後、物語は浮舟を徹底的に追い詰め、さらに死へと誘うのである。その第一は、薫の随身の機転で匂宮と浮舟の仲が薫に知られてしまうことである。

波越ゆるころとも知らず末の松

待つらむとのみ思ひけるかな

人に笑はせたまふな

(浮舟―七八)

この薫の歌は、浮舟の裏切りを責めたものだが、薫に疎まれるのは死ぬほどつらいと思つて浮舟の不安が現

実のものとなるのである。浮舟は「つひにわが身は、けしからずあやしくなりぬべきなめり」（浮舟―七九）と、いっそう苦惱する。そして、「わが心もてありそめしことならねども、心憂き宿世かな」（浮舟―八〇）と、匂宮とのことは、自分から進んでこうなったわけではないとし、浮舟は「心憂き身」を自覚し、我が身の拙い宿世の思いへと向かう。以前、匂宮の強引な侵入により生じた浮舟の運命を、女房の右近は「かうのがれざりける御宿世にこそありけれ、人のしたるわざかは」（浮舟―三〇）と、誰のせいでもない、こうなる宿縁だったのだと「宿世」のせいにし、又「かうのがれきこえさせたまふまじかりける御宿世は、いと聞えさせはべらむかたなし」（同三二）と、逃れる術もなかったので仕方がないところでも「宿世」を語っている。

ここで「宿世」という思想は当時の人々にどのように受けとめられていたのであろうか。小野村洋子氏は「宿世」は平安時代の文芸にあつては大体において實在論的に考えられており、過去世、現在世、未来世をたてた、三世にわたる因果応報の考え方が土台となっている。平安時代の物語を鳥瞰すると、人が現世の境界において当面する憂悲苦惱を、過去世においての自己自身の所行、即ち業にもとづけ、過去世の業因のために、現在かくあるとか、そのようであらざるをえないであろう未来世を、現在に折返し現在においてうけとめるとか、そういうすじ道において了解する態度や考え方がある。」とされる。<sup>注④</sup>したがって、当時の人々にとっては不本意な事態に当面した時、この世に生きてゆくには「仏教の説く「業」や「宿世」の論理に支配されているがためであり、誰しもそれを逃れることはできないのだとして諦め、受け容れる」<sup>注⑤</sup>ことに努めたのである。

振り返ってみれば、浮舟は登場する以前から「憂き身」の具わった人物として、周囲の人々に語られていたことを思い出す。浮舟は母中将の君と八の宮の娘でありながら父八の宮に認知されなかったことから、生まれながらに「憂き身」の添う存在として位置付けられていた。その後、常陸介邸で生立つ過程において、本文には浮舟の存在

は極めて希薄であった。しかし、先行研究で目にするように「東屋巻」が継子譚の話型をなぞっていると見るならば、常陸介郎の日常の中で、浮舟をないがしろにする継父常陸介の粗野な言動において常陸介世界からも隔てられ、はみ出していかざるを得なくなるという「憂き身」の添う過酷な人生を強いられていたと見ることが出来る。

今迄の人生を物語るように「この浮舟ぞゆくへ知られぬ」(浮舟―五三)「浮きて世をふる」(浮舟―六三)の浮舟の二つの歌には、行方の定まらない、さすらいの不安定な人生を送るべく定められた我が身の嘆きが込められている。そのような浮舟の「憂き身」意識は、薫と匂宮との間に挟まれ進退に窮し、絶望のなかで当時の一般の通念であった宿世の意識へと向かう。そして、苦悩の末にたどり着いた宿世の思いから導き出されたものは、「まろは、いかで死なばや。世づかず心憂かりける身かな。」(浮舟―八三)「かく憂きことあるためしは、下衆などのなかにだに多くやはあなる」(同)「かく憂きことあるためし」『河海抄』<sup>注</sup>は「忠臣不仕三君 貞女不更二夫」<sup>史記</sup>を引く。)と思い、次いで、「ただ今いとあやしくなりぬべき身なめり」(浮舟―八五)「わが身ひとつの亡くなりなむのみこそめやすからめ」(同八五―六)「ながらへばかならず憂きこと見えぬべき身の、亡くならむは、なにか惜しかるべき」(同八六)と、連続して我が身を現世から抹消することを一途に願うのである。世間にもめったにない情けない身と、「宿世」から逃れることの叶わないわが「憂き身」の拙さを嘆き、理性的には薫に従うべきだと自分に言い聞かせていながらも、なお匂宮に靡いてしまった自分の愚かさを悔やむ。

何よりもまず、浮舟は匂宮との密事が周りの人々に知られた場合「人笑へ」になることを極度に恐れている。その「人笑へ」を恐れる浮舟の心の動きを順に追ってみよう。

(へ) 君は、けしからぬことどもの出で来て、人笑へならば、たれもたれもいかに思はむ、あやにくにのたまふ人はた、八重立つ山に籠るとも、かならず尋ねて、われも人もいたづらになりぬべし、(浮舟―六六)



(ト) なほわが身を失ひてばや、つひに聞きにくきことは出で来なむ

(同六九)

(チ) わが身行方も知らずなりなば、誰も誰も、あへなくいみじと、しばしこそ思ふたまはめ、ながらへて人笑へに憂きこともあらむは、

(同六九〜七〇)

(リ) ながらへばかならず憂きこと見えぬべき身の、亡くならむは、なにか惜しかるべき、親もしばしこそ嘆きまどひたまはめ・・(中略)・・ありながらもてそこなひ、人笑へなるさまにてさすらへむは、まさるもの思ひなるべし

(同八六)

(ヌ) 憂きさまに言ひなす人もあらむこそ、思ひやりはづかしけれど、心浅く、けしからず人笑へならむを、聞かれたてまつらむよりは、

(同九三)

(ハ) は、浮舟は匂宮とのことが発覚したら周りの者たちが何と思うかを気にし、それを未然に防ぐために八重立つ山に隠れたとしても「あやにくにのたまふ人」は必ず探し出すに違いないと思う。結局二人とも身を滅ぼしてしまふことになるのは必至と考えるのである。そして、我が「憂き身」を「いかにせむ」と困惑し、その思いは「人笑へ」になることを危惧するのである。次に(ト) は、弁尼君と母君が話し合っている言葉を聞いて、浮舟は打撃を受け、「なほわが身を失ひてばや」と死を思う。そして、このまま生きていたら世間の物笑いになるようなことが起こるのであることに思いは至る。(チ) では、わが身が行方知れずになった場合に周囲の者たちの嘆きを思い、それでも生き永らえた場合「人笑へ」になるであろうことを怖れている。(リ) は、(チ) の思いに近似しているが、その上で(ヌ) の「人笑へ」になる有様で薫や匂宮にも見捨てられ、零落して過すのは死ぬに勝る辛い思いをするであろうことを危惧する。そして、(ヌ) に続いて次の歌を詠む。

なげきわび身をば捨つとも亡き影に

憂き名流さむことをこそ思へ

(浮舟―九四)

生きていることによって憂き名を流し「人笑へ」になるのを薫に聞かれるよりは死んだほうがよいと思い、しかし、川に身を投げてても憂き名は濯ぐことが出来ない、と嘆く。ここでも「人笑へ」を気にし、浮舟は入水へと追い詰められていくのである。

右の諸例では、浮舟の「憂き身」の自覚から呼び起こされた結果が、「憂き名」を流され「人笑へ」になることへの危惧であったことが分かる。そこで、右近の語る「死ぬるにまさる恥」(浮舟―八一)があることを認知し、「人笑へ」になるよりも死を選択する浮舟であった。

「人笑へ」になることを恐れ、それよりも死を選んだ浮舟と同様に、作者紫式部も『紫式部日記』の随所に「身の憂き」を嘆じ、自分が人に「笑われる」ことを何よりも恥辱だと考えていたことが知れる。そこで、次の章では『紫式部日記』の中から作者がどのような事柄に「恥」を意識し、自らの思いを浮舟に託したのかを考えてみようと思う。

## 第二章 紫式部の「恥」意識

『源氏物語』に描かれている人物は、自分が世間にどのように見られ又、誇られているかを気にし、「人笑へ」になることを忌避しようとしている。『源氏物語』のみならず、当時の狭い貴族社会の中で「人笑へ」になり、噂の対象となればその社会に身を置くことさえ難しかったのではないかと思われる。

米国の人類学者ルース・ベネディクトの『菊と刀』という書物には、西欧キリスト教諸国の人々の社会を「罪の

文化」の社会と規定し、それに対する日本の伝統的な社会の性格を「恥の文化」として、両者の違いを論じている。<sup>注⑦</sup>ここで言われるように「恥の文化」としての日本の社会では、人々は世間から「笑われる」ことを極度に恐れ、「人笑へ」になることが「恥」として人々の心に浸透していたことから、「笑われる」様な言動は極力慎むように努めた。

「人笑へ」<sup>注⑧</sup>（「人笑はれ」も同義語として含む）の語の使用は、『源氏物語』全体では五八例を数える。その中で浮舟が「人笑へ」になることを恐れる母中将君が四例、乳母が一例、浮舟が自分自身に対して意識するのは四例物語中に見える。又、同時代の物語の「人笑へ」の用例は、『蜻蛉日記』二例、『宇津保物語』五例、『落窪物語』二例、『枕草子』一例、『和泉式部日記』二例、『夜の寝覚』一例である。中でも『源氏物語』で使用される「人笑へ」の語は、他の書物に比較すると極めて多いことが分かる。

しかし、『源氏物語』作者の著書である『紫式部日記』<sup>注⑨</sup>の中に「人笑へ」の語は一例も見当たらない。一方、『紫式部日記』の中で「身の憂さ」を嘆く叙述は浮舟と同様にたえず繰り返され、「人笑へ」に関連する「恥」の意識も随所に見受けられる。

中宮の内裏還御の直前に紫式部が里下りをした時に、改めて宮仕えに出る以前の生活を振り返っている場面は次のようである。

世にあるべき人かずとは思はずながら、さしあたりて、はづかし、いみじと思ひしるかたばかりのがれたりしを、さも残ることなく思ひしる身のうさかな。  
(四五頁)

「世にあるべき人かず」と記されたように当時貴族社会では、天皇を頂点とした身分制度による序列化が為され、それぞれの出自によって身の程の一切が定められていた。人々はその序列化が種々の悲哀に遭遇しても、それは

「わが憂き宿世」と諦観せざるを得なかったのである。「さも残ることなく思ひしる身のうさかな」と嘆く紫式部も、その例外ではない。

宮仕え以前は「はづかし、いみじ」と身の程を思い知らされることもなかったのに、その「はづかし、いみじ」の思いを残るところなく思い知ることになった現在の女房としての我が「身の程」を口惜しく思っている。

さらに『日記』には、他者の恥すべき様を自分自身の痛みとして捉えている紫式部の恥の意識が強く表われている箇所がある。

かからぬ年だに、御覧の日の童の心地どもは、おろかならざるものを、ましていかならむなど、心もとなくゆかしきに、歩みならびつつ出できたるは、あいなく胸つぶれて、いとほしくこそあれ。・・(中略)・・ただかくこもりなき晝中に、扇もはかばかしくも持たせず、そこらの君達の立ちまじりたるに、さてもありぬべき身のほど、心もちるといひながら、人に劣らじとあらそふ心地も、いかに臆すらむと、あいなくかたはらいたきぞ、かたくなしきや。

(五二―三頁)

五節の行事の童女御覧の儀が始まり、童女たちは多くの男性たちの視線を浴びながらも白昼の庭を平然と歩いてくる。男たちに凝視されながら気丈に振る舞う童女の姿に紫式部は同情し、わが身の上へと重ね合わせる。当時の貴族女性たちにとって男性に顔を見られるということは、恥以外の何ものでもなかったのである。女房という職業は、時には御簾越しに男性と向き合って話を交わしたり、直接顔を見られることもあったのである。紫式部が女房という職業を嫌っていたのは、こうした「恥」になることも取えてしなければならなかったことに有るのであろう。このような紫式部の人に「笑われる」ことに対する「恥」の意識が、己の「憂き身」意識をさらに深めていったと思われる。

浮舟に限らず、『源氏物語』の女性登場人物たちは、人から「笑われる」ことは何よりも大きな恥辱と考えていたことは、紫式部自身のそうした心の在り様を投影されたものであったとみることが出来る。

### 第三章 浮舟の出家

ふたたび浮舟の物語に戻ってみよう。「人笑へ」になることを忌避する為、入水を選んだ浮舟は、宇治の院の木立の中に失神していたのを横川の僧都一行に救われる。この後、物語は浮舟の出家へと向かっていくのであるが、出家することにより浮舟の「憂き身」意識は、解消されるのであろうか。

僧都の妹尼の懸命な看護により浮舟はようやく回復する。「尼になしたまひてよ。さてのみなむ生くやうもあるべき」(手習―一九〇)と、死ぬことが叶わない以上出家するしか生きる道がない、尼になることが現世に生きる唯一の道であることを切望する。さらに

「世の中になほありけりと、いかで人に知られじ。聞きつくる人もあらば、いとみじくこそ」とて泣いたまふ。  
(手習―一九二)

浮舟にとっては、自分の生存が知られることによって現世とのかかわりが復活することが何よりの問題なのであり、言い換えるならば、過去の薫と匂宮との関係を知られてしまうことに畏怖し困惑している。しかしそのような浮舟の追い詰められた心情を知らない妹尼君は、一時の気休めとして頂をそぎ五戒を授けて、出家のまねごとをさせる。五戒を授けられたものの、それはまだ完全な現世離脱ではなく、浮舟はなお世にあることの不安がつきまとっているのである。

この後も浮舟の「憂き身」からの離脱を願う心が示される。

限りなく憂き身なりけりと見果ててし命さへ、あさましく長くて、いかなるさまにさすらふべきならむ、ひたぶるに亡きものと人に見聞き捨てられてもやみなばや  
(手習―二〇八)

浮舟の内面の世界は、「いかなるさまにさすらふべきならむ」という、この世に寄る辺のない不安である。「限りなく憂き身なりけり」と思うのは、薫や匂宮とのことも含めた自分の今までの人生を指して言う。浮舟が入水の決意をした時、何も考えることが出来ず、ただ現前の苦悩から離脱することだけが目的としてあった。それが新たに妹尼君の娘婿である中将の執拗な求婚が加わり、浮舟に現世のあさましい過去を思い出させる結果となり、「ひたぶるに亡きもの」と人に見聞き捨てられてもやみなばや」に明らかかなように、「憂き我が身」を世間に捨てられたいという一途な思いは蘇生後より一貫している。「世の中になほありけりと、いかで人に知られじ。聞きつくる人もあらば、いとみじくこそ」(前掲)と泣いた。その「憂き世」からの消滅を願う浮舟の思いは、心を離れることなく続いている。

ここで浮舟と同様に、平安時代の女性たちが我が身を「憂し」と捉えて詠んだ和歌を示してみたい。紫式部が『紫式部日記』の中で「和泉式部といふ人こそ、おもしろう書きかはしける。されど、和泉はけしからぬかたこそあれ。」と紹介する恋多き女性和泉式部にも、この「身」を「憂し」とし、死又は出家を希求する歌がある。

(ル) 厭へども消えぬ身ぞ憂き羨まし風の前なる宵のともし火  
(和泉式部集 続集一三四)

「なほ、尼になりなまし」と、思ひ立つにも

(オ) 捨て果てむと思ふさへこそ悲しけれ君に馴れにしわが身と思へば  
(和泉式部集 続集五一)

(ル) は死を望んでも死ぬことが叶わず、風が吹くままに消え去っていくともし火を自分の身に照らし羨ましく思って詠んだものである。ここでは死ぬことが「憂き身」からの離脱の最終的な方法として捉えられている。又(オ)では、現状の物思いの辛さ故、この世から逃避出来たらと思いい悩んだ時、出家を志向する歌を詠んでいる。詞書の「尼にやなりなまし」は、出家を志してはみたものの、彼女の気持ちが尼になることをためらっているように思われる。さらに「捨て果てむ」については、「尼になってすっかり世を捨ててしまはう」と解釈されてはいるが、捨てるのは「世」ではなくむしろ俗世に生きる「我が身」である。相次ぐ愛する人との別れと、自分の身に降りかかる悲しみが人の世の儂さを思わせ、わが「憂き身」を嘆いた結果としての出家への思いであったのであろう。

(ワ) みもはず空に消えなでかぎりなく厭ふ憂き世に身のかへりくる  
と一人ごちて、袖もしぼるばかりに泣きぬらしけり。

(伊勢集)

(カ) なほいかで心として死にもしにしがな・(中略)・「いかがはせむ。かたちを変へて、世を思ひ離るや  
とところみむ」

『蜻蛉日記』

(ワ) にも憂き世を厭う伊勢の歌が見られる。恋人との恋の破綻に傷心の伊勢は、限りなく厭うこの現世に我が身は帰ってきてしまったと、出家しなかった後悔を詠う。(カ) は『蜻蛉日記』作者の日記の一文である。

ここでも右の歌人たちと同様に『蜻蛉日記』作者が死か出家を願うのも、「憂き身」から逃れることが目的だったと思われる。

右に挙げた例には何れも恋愛の破綻からくる哀傷を書き記したものであり、その苦しみは如何にすれば救われるのか、最後の手段として死又は出家を望むものとなっている。このように当時の女性には、死および出家は我が身

の極まりない「憂き身」からの離脱の道として考えられていたからに他ならない。

さて、ここでまた出家後の浮舟が、はたして「憂き身」からの離脱を叶えることが出来るのかを辿ってみたい。その後、浮舟は僧都の手によりついに出家を果たす。僧都の手で髪を削ぐ儀式を終えた後の浮舟は、「うれしくもしつるかな」（手習―二二九）との思いに達し、これで男女の関係から逃れることが出来る。「胸のあきたるこち」（同）になつてゐる。しかし、物語はその出家生活の行方について浮舟が考えているほど生易しいものではないことを示している。

浮舟の出家を危惧する思いは、周囲の人々から繰り返し述べられている。

(ヨ) 妹尼

残りすくなき齡の人だに、今はと背きはべる時は、いともの心細くおぼえはべりしものを、世をこめたる盛りにては、つひにいかがとなむ見たまへはべる

(手習―二〇六)

(タ) 横川僧都

まだいと行く先遠げなる御ほどに、いかでかひたみちにしかはおぼし立たむ。かへりて罪あることなり。思ひ立ちて、心を起こしたまふほどは強くおぼせど、年月経れば、おんなの御身といふもの、いとたいだいしきものになむ

(同二二五)

(レ) 少将尼

残り多かる御世の末を、いかにせさせたまはむとするぞ。老いおとろへたる人だに、今は限りと思ひ果てられて、いと悲しきわざにはべる

(同二二九)

(ソ) 妹尼



かかる身にては、すすめきこえむこそは、と思ひなしはべれど、残り多かる御身を、いかで経たまはむとすらむ  
(同二三二)

(ツ) 横川僧都の心中

容貌をかへ、世を背きにきとおぼえたれど、髮鬚を剃りたる法師だに、あやしき心は失せぬもあなり、まして女の御身はいかがあらむ、いとほしう罪得ぬべきわざにもあるべきかな  
(夢浮橋―二六五)

(ヨ) の「残りすくなき齡の人だに・・」や、(レ) の「老いおとろへたる人だに・・」という妹尼や少将尼の言葉は、いかに人生を生き切りこれまでと見限ってした出家であっても、それでも出家する時は心細く悲しいものだといふのである。だからこそ若く美しい浮舟の出家を懸念するのである。(ツ) は出家者の一般の通例として、いかに完全に出家した法師でも現世の煩惱を根源から断ち切ることの困難さに対する僧都の深い洞察がここにある。まして若い女の身では罪づくりなことになるかもしれないことを危惧しているのである。

右の諸例は、それぞれ出家を成し得た人々の現実としての重い言葉である。それ故に、まだ行く先の長い女の身で尼の生涯を貫くことの困難さを懸念するのである。しかし、浮舟の心情は、「すべて朽木などのやうにて、人に捨てられてやみなむ」(手習―二四二) や、「世の中になほありけりと、いかで人に知られじ」(前出) と、思っていることからすれば、「人」にも「世」にも見捨てられて終わりたいと願うものである。浮舟の出家は縷々述べてきたように、追い詰められ、現世から逃避するための手段として、死ねなかつた場合の二次的な措置としての出家を選んだのである。したがって、右に挙げた例のように若い女性の出家を危惧する僧都や尼君達の言葉は、浮舟にとっては何れも聞きこえるだけの言葉でしかない。しかし、現世の煩わしいことから逃避するために出家への真摯な意志を固めようとする浮舟ではあるが、母親を恋しく思い、さらに薫からの情の籠った手紙に思わず泣き伏す姿

勢には、現世離脱を完全に果たすまでには、まだまだ無限の苦悩が待ち受けていることが伺われる。

浮舟の出家を書き終えた紫式部にも、宗教による救済は常に理想としての志が有りながらも、『紫式部日記』の消息文の後半部分にはその気持ちにためらいを見せる自己告白の言葉がある。

いかに、いまは言忌し侍らじ。人、といふともかくいふとも、ただ阿彌陀佛にたゆみなく、經をならひ侍らむ。世のいとはしきことは、すべて露ばかり心もとまらずなりにて侍れば、聖にならむに、懈怠すべうも侍らず。ただひたみちにそむきても、雲に乗らぬほどのたゆたふべきやうなむ侍るべかなる。それに、やすらひ侍るなり。としもはた、よきほどになりもてまかる。いたうこれより老いほれて、はた目暗うて經よまず、心もいとどたゆさまさり侍らむものを。心深き人まねのやうに侍れど、いまはただ、かかるかたのことをぞ思ひ給ふる。それ、罪ふかき人は、また、かならずしもかなひ侍らじ。さきの世しらるることのみおほう侍れば、よろづにつけてぞ悲しく侍る。

(八〇～八一頁)

この一節は、紫式部が出家を志向しながらも、迷い続ける心を率直に書き記しているところである。「聖にならむに、懈怠すべうも侍らず」と宣言するほどの出家への決意がありながらも、「雲に乗らぬほどのたゆたふべきやうなむ侍るべかなる」と、臨終を迎えるまでに気持ちがぐらつくようなことがありそうだと、とする叙述には、揺れ動く気持ちが述べられている。

右に述べている「罪」は、仏教では「自己が成仏するのに妨げとなる行為、それにより苦の報いを受ける言動をいう」ことであり、「現世的な生活への「執着」という意志・行為は成道を妨げる第一の罪障<sup>註</sup>」であったのである。紫式部が自分を「罪ふかき人」とするのは、現世への執着が強くなることを自覚していたからであろう。そうした自分がたとえ尼になったとしてもおそらくは往生することは叶わないだろう、とし、「さきの世知らるることのみ

おほう侍れば」と前世の「宿世」の拙さを深く自覚し、この辛い「宿世」を持つ身が何事につけても悲しいと述べている。

物語の中で、浮舟を出家へと踏み出させながら身動きできない状態で佇ませているところには、右の消息文にある作者の心境を反映しているのではなからうか。作者はそうした現実の困難を乗り越え難い自身の思いを、浮舟創造におり込めたのであろうと思われる。

## むすび

紫式部やこの時代の人々が、なぜそれほどまでに出家思考を強くしたのであろうか。一般的に当時の狭い貴族社会の中に生きる女性たちは、夫婦や男女関係にしか自己の存在感を見出すことが出来なかった。それ故に夫や恋人の愛情の対象である間は女性は道心を抱くようなことは無く、まして自主的に出家を考えるような事は無かったのである。ところが、夫や恋人との離別、身近な人の死、こうした自分にふりかかる人の世のはかなさと、男女の浮き沈みに宿世の拙さを思い心を曇らせた。そして自分の人生を「宿世」と諦観することで、「憂き身」の意識はさらに深まっていく。この様に苦悩する当時の世間一般の若い女性が「憂き身」から離脱する最後の手段として、出家を果たすことが自身の身の処し方だったのであろうと思われる。

しかし、彼女らそれぞれが、出家を決意することに逡巡している（浮舟は出家をしている）姿が描き出されている。仏教でいう「執着」が「第一の罪障」だとするならば、彼女らはいまだこの世に対するあらゆる執念を捨てきれず、現実の世俗生活からの離脱を成就できるかどうかで思い悩んでいるようにさえ見える。そうした姿は

紫式部自身『紫式部日記』に記したように、たとえ尼に姿を変えたとしても、現世に執着する「身」が存在する限り出家を果たすことは容易ではないことを示している。

こうした紫式部の現世執着の自己認識、自己の罪障の深さの自覚が、彼女の出家志向に「たゆたふ」心を生じさせていることが、『源氏物語』の最後のヒロイン浮舟に「憂き身」の添う過酷な人生を与え、出家後の危うげな姿を創造させたのであろう。

〈注〉

- ① 池田亀鑑編者『源氏物語大成第七冊』（中央公論社 昭和六〇年四月）
- ② 鈴木日出男『百人一首 日本の古典』（筑摩書房 平成一七年十一月）
- ③ 佐藤勢紀子『源氏物語の女性たち 宿世の思想』（ぺりかん社 平成七年二月）
- ④ 小野村洋子『源氏物語の精神的基底』（創文社 昭和四五年四月）第三章第二節一
- ⑤ 増田繁夫『源氏物語の人々の思想・論理』（和泉書院 平成二二年三月）
- ⑥ 玉上琢彌編・山本利達、石田稯二校訂『紫明抄 河海抄』（角川書店 昭和六三年一月）『河海抄』卷十九（浮舟）引用による。
- ⑦ 長谷川松治訳『菊と刀』（社会思想社 平成五年五月）
- ⑧ 本稿の「人笑へ」の用例は、池田亀鑑編者『源氏物語大成第八冊』（中央公論社）、西端幸雄・木村雅則・志甫由紀恵編者『平安日記文学 土佐日記・蜻蛉日記・和泉式部日記・紫式部日記・更級日記 総合語彙索引〔索引編〕』（勉誠社）、宇津保物語研究会編『宇津保物語 本文と索引 索引編』（笠間書院）、松尾聰・江口正

弘編者『落窪物語総索引』（明治書院）、松村博司・榊原邦彦・武山隆昭・塚原清・藤掛和美編者『枕草子総索引』（右文書院）、東節夫・塚原鉄雄・前田欣吾編者『和泉式部日記総索引』（武蔵野書院）、阪倉篤義・高村元繼・志水富夫編者『夜の寝覚総索引』（明治書院）に拠った。

- ⑨ 池田亀鑑・秋山虔校注『紫式部日記』（岩波文庫 昭和三十九年十一月）
- ⑩ 佐伯梅友・村上治・小松登美『和泉式部集 続集篇』（笠間書院 平成二四年六月）
- ⑪ 関根慶子・山下道代『伊勢集全釈 私家集全釈叢書16』（風間書房 平成八年二月）
- ⑫ 松村誠一・木村正中・伊牟田経久校注・訳者『土佐日記 蜻蛉日記 日本古典文学全集9』（小学館 昭和四八年三月）
- ⑬ 増田繁夫『評伝 紫式部 ―世俗執着と出家願望―』（和泉書院 平成二六年五月）